第一部　研究論文

近世の女性読者と古典の大衆化

―西川祐信の『画本朝日山』を題材に―

ゲルガナ・イワノワ　Gergana Ivanova

古典文学は、過去への繋がりを保ちながら新たな創作を促がす豊かな資料として、各時代の筆者や芸術家によって繰り返し見直されてきた。享保の改革（一七一六―一七三六）が終わったころ、日本の古典文学は創造力に富んだ発展を遂げた。これらの作品は、政治的な核心から安全な距離を置いていたため、全ての町人に宮廷貴族に関わる高尚な文化活動への参加を認めさせ、そして江戸社会における全ての階級の人々に教育を受けることを支援した[1]。

吉宗の改革によって引き起こされたこのような社会の変化は、西川祐信（一六七一―一七五〇）が古典文化に基づく創作に関心を移したことから読み解くことができる。祐信晩年にみられる古典への適応の仕方は、吉田兼好の『徒然草』に基づく『絵本徒然草』（元文五年〈一七四〇〉）や、清少納言の『枕草子』に基づく『画本朝日山』（寛保元年〈一七四一〉）、藤原公任の『和漢朗詠集』に基づく『絵本寝覚種』（延享元年〈一七四四〉）、『平家物語』に基づく『絵本亀尾山』（延享四年〈一七四七〉）、『百人一首』に基づく『絵本小倉山』（寛延二年〈一七四九〉）といった祐信作品に表れている。

では、古典文学はどのようにして近世の読者たちのために構築されたのであろうか。なぜ、古典文学の特定の要素が強調されるのであろうか。文章のみの本から絵入り本への関心の移り変わりは、作者や想定された読者について何を明らかにするのであろうか。これらが本論文で検討する問題の幾つかである。文学の歴史上、重要な位置を占めるにもかかわらず、あまり研究されてこなかった『画本朝日山』に焦点を当て、考察していきたい[2]。本作品の重要性は、これが江戸時代において初めて出版された『枕草子』のダイジェスト版であるという点に置かれている。十七世紀に刊行された三冊の『枕草子』完全注釈に続いて、祐信の作品は女性や子供も巻き込むことにより、この平安時代に書かれた作品の読者層を拡張させた最初の試みであった。さらに『画本朝日山』は、十八世紀中期から十九世紀の女性読者たちの間に清少納言の作品を流行させ、後の古典応用作品の基礎を築くという重要な役割も果たした。

『画本朝日山』の先駆者

現在、挿絵のついた『枕草子』の全段が全て揃った原本は残っていない。絵が付随する『枕草子』の現存する最古の例は、十四世紀初頭、鎌倉時代に制作された『枕草子絵巻』である。それは白描絵巻で、詞書は伏見院（一二六五―一三一七、在位一二八七―一二九八）か、もしくは息女の進子内親王（生没不明）の筆によるとされている[3]。しかし、遺されているのは『枕草子』のうち、七段の日記的章段が含まれる一巻の巻物のみである[4]。

三田村雅子氏によると、そのうち五段は、中宮定子のサロンが落ちぶれていった長徳元年（九九五）から長徳五年（九九九）にわたる時期の一条天皇と中宮定子に焦点が当てられている。三田村氏はまた、十世紀後半に中宮定子と藤原道長の間に起こった勢力争いが、その三世紀後に政権を争う事になる大覚寺統の新勢力である亀山天皇（一二四九―一三〇五、在位一二六〇―一二七四）と、持明院統を代表する後深草天皇（一二四三―一三〇四、在位一二四六―一二六〇）[5]の対決と重なることも指摘している。『枕草子』原本から、史的な故事や人物についての場面の選出は、白描絵巻制作当時の天皇家の二政権の間に起こった政治の緊迫状態という史実を仄めかしている。さらに三田村氏は、中宮定子のサロンの豪華さや調和性に焦点を当てた絵巻の内容が、その後の中宮定子と取り巻きの悲劇的な運命を知りながらも、持明院統の政権を復活させたいという願望の現れであると論じている[6]。

挿絵つきの『枕草子』は、その後四世紀に渡って制作されなかった。長年『枕草子』に挿絵が付けられないと認識されたのは、文中に含まれる和歌の数が少ないことと、多様な文学のジャンルが混在しているからである。十六世紀後半に『枕草子』のパロディーが登場し始めるといっても、『清少納言犬枕』が刊行された元禄十五年（一七〇二）までに、『枕草子』の絵入本が制作されなかった。しかも興味深いことに、それらの絵は元禄十年（一六九七）刊行の絵本『伊勢物語』からの転写である[7]。

*1　横田冬彦「近世の学芸」（『近世社会論』第六巻、日本史講座、東京大学出版会、二〇〇五年、二九七―三三一頁）
*2　田中重太郎氏は『画本朝日山』の翻刻及び簡潔な解説を提供した。田中重太郎『清少納言犬枕集』（古典文庫、一九八二年）
*3　三田村雅子「天皇制から枕草子をよむ」（『国文学』、二〇〇七年、第五二巻六号、四四―五一頁：四四頁）
*4　枕草子絵巻に収録されている章段は、「正月十日しけいさまいり給」「淑景舎東宮に」、「五月はかりつきもなういとくらきに」、「故殿の御ために」、「無名といふ琵琶の御琴を」、「職の御曹司におしはすこと」、「はしたなきもの」である。
*5　Michele Marra, *Representations of Power: The Literary Politics of Medieval Japan* (Honolulu: University of Hawai'i Press, 1993), 6-12.
*6　註3、四六―四七頁。
*7　ジョシュア・モストウ氏の指摘に感謝の意を表したい。『伊勢物語』の挿し図は、山本登朗他編『伊勢物語版本集成』（二〇一一年、竹林社）に収録されている。

『画本朝日山』

寛保元年（一七四一）の京都で出版された『画本朝日山』は、古典に挿絵を加える事により、『枕草子』を多数の読者に普及させた。日記的章段が中心になっていた鎌倉時代の絵巻と違い、『画本朝日山』は三冊に分かれており、『枕草子』の八十類聚章段のうち四十段を取り入れている。これらの章段は、「うれしきもの」や「山は」といった段のように、『枕草子』の三分の一を占める「ものづくし」もしくは、「物は付」という類聚章段に分類されている。間違いなくこの類聚章段のブームは、知識をカタログ化させるガイドブック、名簿、旅行記といった情報誌の出版の興隆を反映している。また文学界では、俳諧の一種である雑俳がこの「物は付」の流行に貢献した。「物は付」は、平安時代からすでに存在していたとはいえ、ちょうど『画本朝日山』が出版された寛保時代（一七四一―一七四四）に雑俳の一種として、人気のピークを迎えた。「物は付」とは、作品の優劣をつける点者と呼ばれる判者が出す「・・・物は、」「・・・する物は、」といった題に対して、機知に富んだ答えを付ける短い句である[8]。このような文学サークルは、『画本朝日山』の構造に近似している「物は付」の句集を著録し、編纂した。

「物は付」のような句は、また道徳教育における便利な道具としても使われたと考えられる。様々な行儀の例が特定のカテゴリーの中に収録され、制作者の提示する教訓が読者に伝わる仕組になっているのである。例えば、『画本朝日山』の中で「人の子の孝なる」は、「あはれなるもの」の段中に、そして「あはあはしき女」は「他にあなづるるもの」の段中に収められている。『画本朝日山』の書体は他に例がみられないが、当時影響力のあった北村季吟の『枕草子春曙抄』（延宝二年〈一六七四〉）に最も近いといえる。四十段のうち、六段は『枕草子』に見られるとおりである。残りの三十六段は短縮されており、多数ある例のうち、『枕草子』に含

●図１：西川祐信画『画本朝日山』（相愛大学図書館春曙文庫蔵）

まれている段がそのまま写されたものは、五事項以下である[9]。田中重太郎が指摘するとおり、ただ一箇所のみ「見て心知よきもの」と題する段は、『画本朝日山』には収録されているが、『枕草子』には含まれていない。この段は、次のように書かれている（図1）。

知りたる人の業の能出来たると
祭のはやし物
又は庭に植たる菓などの生たるいとうれし

これは、最古の清少納言の作品のパロディーである『犬枕并狂哥』（慶長五年〈一六〇〇〉）に典拠を得ている。問題の段は「見たきもの」と題され、次のように記述されている。

月、花、思ふ人の顔
上手の能
数寄に入れたる道具
惚れたる人の心中、同文も
名所〳〵[10]

人が見たいものの例の中で、「上手の能」―要するに優れた能舞台でのパフォーマンスであるが―、それは『画本朝日山』にある「知りたる人の業の能出来たる」のくだりと類似している。挿絵は、この「能出来たる」と同じ典拠に基づいている。ここから『画本朝日山』の制作者たちが、『枕草子』の注釈書のみならず、大衆文学としてのテクストをも参照している事が理解される。

日記的章段や随想的章段を全て除外したことに加えて、制作者たちは豊富な類聚を編集し、平安文化と祭礼、儀礼や衣装の記述といったような日常生活や、歴史的人物といった類聚章段の項目を数多く削除している。このような『枕草子』の「一時性の抑圧」[11]は、後世の読者たちが本作品をより簡単に解釈できるように、また、思想的な操作を加えやすいように作り変えている。挿絵に描かれている情報によって、当時の社会の生活へと関心の焦点の変換が伺える。ここでは、三十五点の挿絵が江戸時代の男女を描いており、そして四点のみが平安宮中の人物を描いている。

*8　武藤禎夫「〈ものは付〉雑考―めでたきものは」（『川柳しなの』第六一〇巻〈一九九四年一月〉、一―六頁、一頁）
*9　『枕草子』から抜粋されている章段は次の通りである。「つねよりもことにきこゆる物」、「みじかくてありぬべき物」、「他にあなづらるる物」、「見ならひする物」、「いひにくき物」、「ただ過ぎに過ぐるもの」。
*10　前田金五郎、森田武編「犬枕并狂哥」（『日本古典文学大系90御伽草子集』、一九六五年、岩波書店、三六頁）
*11　Smith, Barbara H., *Contingencies of Value: Alternative Perspectives of Critical Theory* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1988), 50.

『画本朝日山』の序は、以下のとおりである。

前聞少納言は清原元輔の女にて上東門院にめしまつわされ才賢世に絶倫女房にぞありけるそれが後々讃岐にすまゐける頃むかししたはしく都のゆかしきあまり自かきつらねをきたる草子の中より情に切なる詞どもを撰み絵になんうつして朝日山と題し鄙のつれ〳〵を消遣けるとぞ予此言の見まくほしく年月おもひ居けるに此ほど他のもとにて古物語集など見侍る中不図此三巻を見あらはしければいみじううれしく思ひて独見んもそうぐ〵しからんこと人にも見せてしがなと更に其絵を今様の筆にあやなし侍りぬ猶ゝやけに伝て蘭閨の弄ものともながらばふみのはやしのさいはゐおほきのみ。

この序には『画本朝日山』の編集者であろうと考えられる源折江の署名がある[12]。彼は、清少納言が宮中で仕えた後、四国の讃岐で暮らしたと言及しているが、誤って彼女が上東門院（藤原彰子〈九八八―一〇七四〉）の女房であったと紹介している。清少納言が讃岐を訪れたという歴史的な記録や、彼女が藤原彰子に仕えたという記録は遺されていないにもかかわらず、多くの伝説は中宮定子が亡くなった後、彼女が四国を放浪し、特に讃岐や阿波を彷徨い歩いたという様に彼女の人生を作り直した。国学者であった安藤為章（一六五九―一七一六）は、著書『年山記聞』の中で、別の国学者、契沖（一六四〇―一七〇一）を引用し、清少納言は晩年を四国で過ごしたと記述している[13]。さらに、清少納言が彰子の女房であると伝えられる所以は、彼女が十三世紀の『十訓抄』や『悦目抄』から、近世の女性向け教訓書にいたるまでの多数の教訓的な作品中で、そのように構築されていることに平行している[14]。江戸時代の教訓的なテクストの例は、『女郎花物語』（寛文元年〈一六六一〉）、『本朝女鑑』（寛文元年〈一六六一〉）、『女用文章往かひ振』（文化八年〈一八一一〉初版、天保四年〈一八三三〉二版）が挙げられる。十七世紀に『枕草子』の注釈書を制作した北村季吟、加藤磐斎、岡西惟中三人の和学者たちは、この誤りを正そうと試みた。しかし折江は、そのような試みを無視して清少納言のイメージを以前の教訓的な作品に合わせて再構築したのである。

そもそも、『朝日山』という題は、宇治川の東岸に位置する山城地方の地名の歌枕を示す。それは、朝の光や、儀式のお祝い事と関連する[15]。その題は『枕草子』の文中には一度も現れていない。題名は直接『枕草子』について触れていないが、序ではこれが清少納言の作品のダイジェスト版であり、挿絵が彼女自身によることを述べている。序はさらに、制作者たちが挿絵を描き直したことを述べているが、テクストが編者によって書きかえられたことについては言及していない。言い換えれば、この序は『画本朝日山』が『枕草子』を補遺する作品であるとしているのである。一方、祐信の署名で書かれた「凡例」では、次のように述べている。

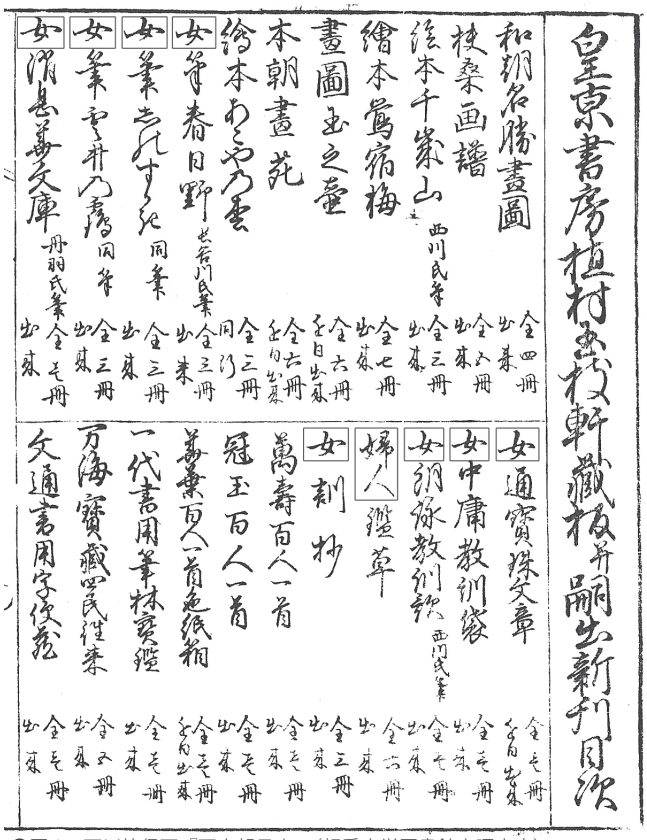
此書全清女のかきあつめおける本にして画図もふるびおもしろく最殊勝なればその儘ゝにて木にちりばめおこなはんこそ

本意ながら虫ばみ或はきえうせし所も数〳〵なれば其世の模様を今にうつして詞のみとり来つゝ画図をいまやうにあらたむのみ絵を今やうにせしかば時代のたがひおほくて道風の筆といふ朗詠集の嘲りのがれがたけれども天王寺の鳥居を朱にいろどるも見ものにかふるのはたらきあればとがめもあらじと唯絵そらごとの諺にのがれぬしかはあれど見ん人よく〳〵用捨ありて虚実をわきまへたまへかし

序と同様に「凡例」でも、祐信は『画本朝日山』が、元来挿絵がついた最殊勝の清少納言による文章のコレクションであるという説を保持している。祐信はさらに、彼が絵に装飾を加え当時の画風を取り込んで描き直したことを供述し、また原本のテクストが時間の経過と虫食いで被害を受けたため、彼がそのような手を加えたことを正当化している。祐信が、過去の作品が当時の方法によって変えられてしまうことについて心配しているのが明らかである。すでに自身で改作した『徒然草』の八十八段を引用して、祐信はその逸話と彼による『画本朝日山』の段の挿絵との間に平行線を見出している。

その逸話によると、有名な三筆の一人である小野道風（八九四―九六六）によって写本された『和漢朗詠集』を一冊持っていることを自慢して鼻にかけている男性がいた。しかし、彼の自慢は馬鹿げており、彼をみんなの笑いものになった。なぜなら、『和漢朗詠集』は道風の死亡と同じ年に生まれた藤原公任（九六六―一〇四一）によって編纂された著作物だからである。祐信は、著作物の編纂年が書家の活動期と異なる事を指摘するために、この逸話を引用している。そうすることで、彼自身が挿絵を描いた『画本朝日山』が七世紀前に制作されたことを重ねている。また、祐信は天王寺の鳥居を引用して、目を楽しませるためにその鳥居が赤く塗ってあるにもかかわらず、批判の対象になっていないことを述べている。このような引用の仕方は、祐信が自身の作品に対する鑑賞者の反応を気にかけていたことを明らかにする。彼は作品の真正性を大変気にしているが、同時に市場性にも深い関心があることが読み取れる。

*12　山本ゆかり『上方風俗画の研究：西川祐信・月岡雪鼎を中心に』（二〇一〇年、藝華書院）
*13　塩田良平『諸説一覧枕草子』（一九七〇年、明治書院、四二―四四頁）
*14　註13、四二―四四頁。清少納言が藤原彰子に仕えた記述は、鎌倉中期に成立した『十訓抄』や『悦目抄』に登場し、江戸時代にかけて続いた。近世に出版された女訓書に圧倒的である。
*15　片桐洋一『歌枕歌ことば』（一九六六年、笠間書院、一二―一三頁）



●図2：西川祐信画『画本朝日山』（相愛大学図書館春曙文庫）
※囲み線は稿者による

「あとがき」にも祐信の落款があり、次のように記されている。

此三巻は清女手沢の存する処の古ざうしなりけるを折江君なる人もち出ていかにや今やうの絵にうつして世の児童にも見せてしがなと頻の求めいなみがたく時と事とのたがひおほきはかへり見もせず詞によせのせちなるさまのみ筆にまかせて少納言の昔を今につぎぬ見ん人〳〵此こゝろだにをしり給はゞさのみとがめもとあらじと筆をかいやりぬるのみ

この「あとがき」で、祐信は読者たちに折江が取り上げた後の清少納言が称えられている草子を見つけるように語りかける。祐信はまた、作品の文脈と作品の享受者の文脈の違いを無視し、彼の筆がテクストの最も興味深い側面のみを描いたことを説明している。祐信は、新しい絵を描いたことで、読者に対して謝罪の態度を表している。祐信が想定された読者の中に子供を加えたことに対して、折江は『画本朝日山』を女性向けにすると、その序の中で宣言している。

『日本古典書総合目録』によると、『画本朝日山』は折江と祐信が初めて共同制作した作品である。二作目の共同作品は、『絵本武者備考』と題して武者の逸話の絵本として寛延二年（一七四九）に出版された。さらに、『画本朝日山』は祐信と内藤道有が共同で制作した作品でもある。山本ゆかり氏が指摘したように、道有は植村玉枝子、晩香散人玉枝、晩香散人内藤玉枝、内藤玉枝、植村といった様々な名前で署名した。読み書きの練習として数多く京都で作成された往来物は、道有と同一人物と推測される京都を本拠地にした書肆植村藤右衛門によって出版された[16]。山本氏はさらに、道有が「往来物」の制作に筆者として、また編者として関わったことを示す。彼の幾つかの出版物は、小倉百人一首鳳凰台、女朗詠教訓歌、女消息栄文庫を含んでいる[17]。道有の刊行間近な本のカタログは、『画本朝日山』初版の最後の頁に記載されている。これらの出版物は、『女筆春日野』、『女筆しのすゝき』、『婦人養草』、『女中庸教訓鑑』といった題名から明らかなように、女

性読者を対象にしている（図2）。そのため、『画本朝日山』の巻末に載っているこのカタログは主に、若い女性向けの読み物として宣伝されていたといえる[18]。

日本古典文学と女性の教育

多様なトピックの中で、『画本朝日山』の制作者たちが、『枕草子』から選んだのは、女性に関する事項であった。例えば、「他にあなづらるる物」の段から浮ついた女性は軽蔑されるべきであること、「見て心地よきもの」の段から魅力の無い女性が昼寝をするのは見苦しいこと、「たのもしげなきもの」の段から妻をないがしろにする婿は将来性がないということ、「みじかくてありぬべき物」の段からは少女の声は柔らかく、下級社会に暮らす女性の髪は短い方が良いということが、選出されている。

さらに、「つれづれなぐさむる物」と題する段は、宮中の恋愛物語や、囲碁に双六、幼い子供たちが可愛らしく喋っているところや、若い女性と一緒に双六を遊んでいる場面の挿絵と共に掲載されている。『枕草子』に記録されている禁欲期間にやってきた訪問者についての例は、『画本朝日山』に載っている同じ段から削除されている。原文は次の通りである。

男のうちさるがひ、物よく言ふが来たるに、物忌なれど、入れつかし。

このような原本テクストの操作は、少女たちにとって道徳的に不適切であると認識されたため、無害な娯楽や、母性に関する事項とすりかえることを試みたと示唆することができる。

『画本朝日山』における女性読者のリーダーシップを示す別の例として、第一冊には二つの段が含まれている。それは、「大にてよき物」と「みじかくてありぬべきもの」である。これらのトピックが対照的であるため、この二段は一対として扱われる。「大にてよき物」は次のように書かれている（図3）。

家居　菓物　餌袋　火桶　鬼灯　法師　松の木　硯の墨　山吹の英　馬も牛もよきは大にこそあんめれ

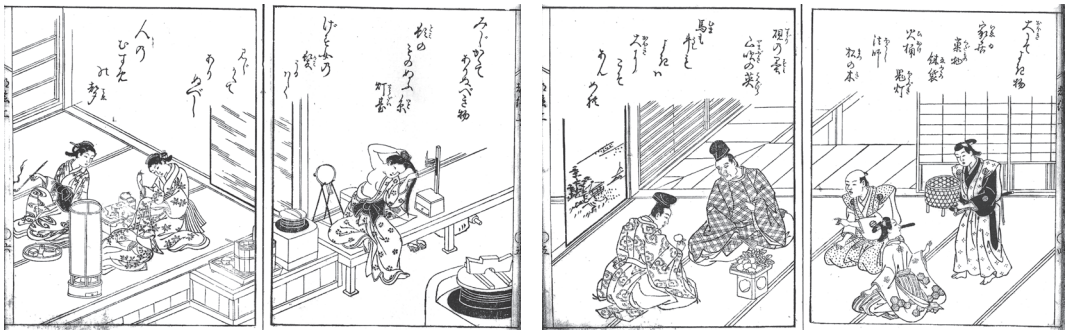
*16　註12、三二―三三頁。
*17　註12、三三頁。
*18　カタログの題名は、「皇京書房植村玉枝軒蔵板并嗣出新刊目次」である。

『枕草子』の同じ段には、「をのこのめ。あまりほそきは、女めきたり。また、鋺のやうならむは、おそろし。」といった文章がふくまれている。しかし、挿絵が三人の大人と若衆の髪型をしている二人の若い男性といった男だけを描いているにもかかわらず、そのテクストは、男性について語っていない。

この段の後には「みじかくてありぬべきもの」と題された段が続く（図4）。そこには、

頓のものぬふ糸
灯台
げす女の髪うるはしくみじかくてありぬべし
人のむすめの声

と記述されている。この段は『枕草子』の段と対応し、再現されている。それには三点の事項が含まれているが、いずれも女性に関する事柄、すなわち裁縫、女性の髪、そして若い女性の声である。挿絵もやはり、お茶の準備や裁縫、髪を梳いている女性だけを描いている。これら二段の挿絵はそれぞれ男性の場面と女性の場面を描いているが、詞書はわざと男性のトピックを避けて、女性に関するトピックを強調している。



●右／図３・左／図４：西川祐信画『画本朝日山』（相愛大学図書館春曙文庫蔵）

このようなテクストの介入は、『画本朝日山』が女性の問題に強く焦点を当てていることを示唆する。

『画本朝日山』は「つねよりもことにきこゆる物」と題された段から始まるが、この段は新年と関連している。この段に添えられた挿絵には、牛車を引く公家が門松の飾ってある門を通っていく場面が描かれている（図5）。このエピソードは新年のために出版された作品で、お祝いの雰囲気を醸し出している。

次の段は「あはれなるもの」という題である。

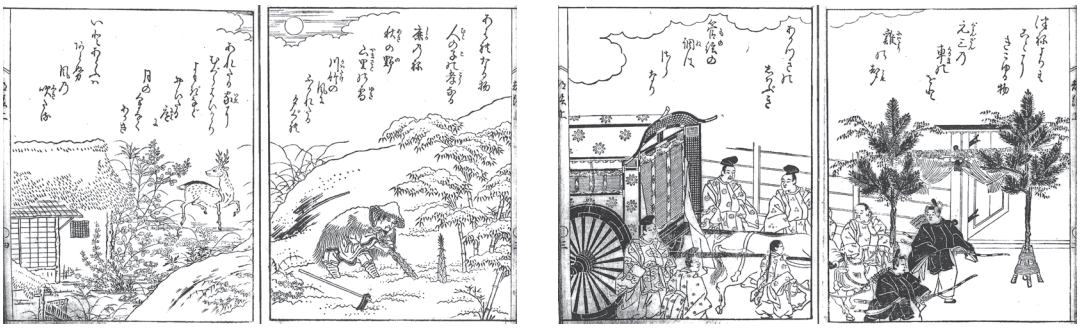
人の子の孝なる
鹿のね
秋の野
山里の雪
川竹の風にふかれたる夕ぐれ
あれたる家にむぐらはひかかりよもぎなどおひたる庭に月のくまなくあかき
いとあらふはあらぬ風の吹たる

筍を掘っている男、鹿、荒廃した家と庭、月、雪に包まれた山を含む挿絵は、テクストの各部分を描いている（図6）。この男は「二十四孝」の内、孝行息子孟宗が年老いて病気の母に筍を所望され、真冬の季節はずれにも関わらず、雪山に入り、彼の涙

が雪を溶かして多くの筍を見つけ、母に筍の汁物を作って食べさせ、天寿を全うさせたという物語に典拠を得ている[19]。

この場面は頁の右側全てを使って描かれ、最初の絵が読者の凝視を捕らえるように配置されている。絵自体の重要性に加えて、この孝行という事柄が巻頭に置かれている。この教訓的な段の位置づけは、教育が本作品の目的であることを明確にし、また孝行は、儒教においての美徳の中心であることを思い起こさせる。『画本朝日山』に含まれるほぼ半数の挿絵は、（一人の男性の例を除いて）女性グループを描いている。ここでは、女性のイメージを彼女たちの髪、裁縫、茶道、読書、香道と結び付けている。挿絵は、鏡台、文匣、茶道具、琴、双六盤、衣桁、貝桶、櫛笥等といった女性の道具や調度品を描いている。

そのうち、四点の挿絵のみが貴婦人の様子を描いている。例として、第一冊の十三段「過に



●右／図５・左／図６：西川祐信画『画本朝日山』（相愛大学図書館春曙文庫蔵）

しかたこひしき物」が挙げられる（図7）。画中に記されたテクストは、次のように書かれている。

枯たる葵
去年の扇
ひいなあそびの調度
月のあかき夜
又折からあはれなりし人の文
雨などの降てつれづれなる日さがしいだしたる

挿絵は二人の女性が、手紙と思われるものを読んでおり、もう一人の女性が束になった何かを盆に載せて運んでいる場面を描いている。挿絵は、「枯れたる葵」や「雨」などの題名も挙げている。部屋の奥には大きな御厨子の棚があり、本、巻物そして木箱が置かれている。絵は「ひいなあそびの調度」と題されているが、祐信は女性の調度品の重要な部分である棚を画中に取り入れた。このように詳細な部分を描き込むことによって、女性の教育は彼女たちの結婚の可能性と深く結びついている事を強調している。

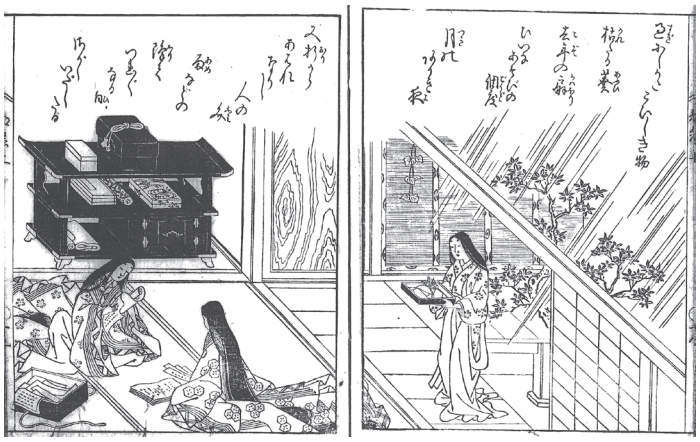
*19　藤井乙男『御伽草子』（一九三二年、岩波書店）

もうひとつのエピソードは、貴婦人を描いた第二冊の十二段である。「うれしきもの」の段のテクストは、次のように書かれている。

はづかしき人の歌のもとする、たづねたるにふとおぼへ居たる我ながらうれし

さしぐし為作ておかしげなるもうれし。

挿絵は、お互いに向き合っている一人の女性と一人の男性を描いているが、隣の部屋に三人の女性が身だしなみを整えている場面も描いている（図8）。画面左の場面は、男性の挑戦を受けて、女性が和歌を競って出す場面を思い出させる。『枕草子』の中にこれらの場面は記されているが、全ての場面において、男性が女性の和歌を詠む能力を称えている。これらの場面の最も有名な例は、村上天皇が宣耀殿の女御に『古今和歌集』二十巻すべて暗記していたかどうかを試験したというエピソードである。このような引用は、『画本朝日山』が女性の教育を促している事を示す。隣の部屋には、身支度をしている女性の姿が、特定の女性らしい調度品に囲まれて描かれている。それらの調度品のうち、貝合わせの遊びに使う貝をしまっておく貝桶が見られる。このような桶は、夫婦間の貞操を象徴するため、女性の調度品として含まれているのである。そのため、この絵には女性の教育と結婚というアイデアが混在しているといえる。



●図7：西川祐信画『画本朝日山』（相愛大学図書館春曙文庫蔵）

女性の教育を描いているこれらの場面の他に、「なまめかしきもの」の段の挿絵がある（図9）。『枕草子』は五月に行われる祭礼儀式で着用される人々の服飾について記述している。しかし、『画本朝日山』は、男性と女性を一人づつ選んでいる。テクストは次のように書かれている。

ほそやかにきよげなる公達の直衣すがた

わかき女房のおかしげなる夏の几帳のしたうちかけて白きあやふたあひ引かさねて手習したる

薄様の草子むらごのいとしておかしくとぢたる

あたらしくもなくていたくふりてもなき檜皮屋に菖浦うるはしくふきわたしたる

この場面は、『伊勢物語』の二十三段「河内越え」に典拠を得ている。このエピソードでは、一人の男性が垣根越しに、化粧をしながら夫への愛情を表す和歌を詠んでいる彼の妻を覗き見ている。女性の貞操と無嫉妬心が、一度冷めかけた夫の愛

情を煽り立て、彼女にもう一度振り向かせる場面である。この段では、テクストが執筆中の女性を記しているのに対して、挿絵は読書中の女性を描いている。しかし、男性は直衣姿、女性はひさしに杜若の意匠という風に、それ以外の場面では絵は忠実に物語を描いている。挿絵は『伊勢物語』を引用し、教養の高い女性が男性にとって魅力的であることを促している。言い換えれば、「なまめかしきもの」の段は、読み書きといった女性のたしなみに加えて、貞節や無嫉妬心といった、既婚女性に求められた重要な性質も奨励しているのである。

いくつかの挿絵では、貴婦人が女性の手本となり、真似するに値する性質を構築しているところを表現した。残りの挿絵は、裁縫、料理、掃除、育児といった上流階級の女性文化を描いている。これらの能力は、武家や裕福な商家へ嫁ぐ娘にとって大切であると理解されていた。

●上／図８・下／図９：西川祐信画『画本朝日山』（相愛大学図書館春曙文庫蔵）

ここまで述べてきたように、『画本朝日山』は、単なる絵本として分類されてきたにもかかわらず、そのトピックの大半は女性の日常生活に関する事柄と関連する。多数の挿絵は、主に上流社会の女性に関連する多種の芸術や行事に携わっている場面が際立っている。刊行予定の出版物カタログは、女性の読書者層を狙って宣伝し、『画本朝日山』が徳川社会の若い女性の生活向上を目指す教育を目的としていた事を示す。

祐信以後の『画本朝日山』

『画本朝日山』は安永元年（一七七二）と万延元年（一八六〇）に再版された。二版目に続いて、この作品は、江戸において『笑本春の曙』と題する春本の刊行を促すことにもなった。『画本朝日山』のように、この改作は三冊から成り、選出された段は『画本朝日山』と同様に並べられていた。しかし、その内容は官能的な文章に変容し、そのイメージも男女の性的な関係に擦り替えられている。大半の場面は、結婚式、初夜、結婚生活、といった結婚にまつわるトピックであり、男女の親密な交わりである。本の巻末に、結婚と女性の性について二つの話題を結び付けている。『枕草子』を、幸せな結婚に繋がるテクストとして変化させ、幸せな結婚の中核が夫婦間の調和のとれた性生活であるという結論を導いている。官能的な内容にも関わらず、この本は女性が夫に追従し、夫婦関係の向上に役立つよう助言するための、女性の教科書として扱われていたと考えられる[20]。

文政元年（一八一八）、『画本朝日山』は、『枕草子』の別の改作である「清少納言の奇才・同枕草子の奇語」というセクションを含む、『女用文章往かひ振』の成立の基本文献となった。これらの改作本は、過去に生きた類まれな才女としての清少納言のイメージを投影している。この段は、十四段と寛保元年（一七四一）年刊行の『画本朝日山』に表れる段を踏まえて描かれている。その序は、『画本朝日山』を基本文献として承認していない。しかし、序は『画本朝日山』と近似している。清少納言を清原元輔の娘で、上東門院の女房であると紹介し、また『画本朝日山』を、清少納言が讃岐滞在中に執筆した『枕草子』のダイジェスト版であると言及している。序は、『枕草子』全篇を理解し、女性読者を指導することによって終わっている。それは、日常の態度は冷静に、他人と交わるときには理解力を持って心に自然の優美さを纏い、和歌を詠むときは月や花を思い、感情を豊かに持ち、といった風にである。

こゝろあるの女子、此意言にめで給はゞ、全きかのさうしを取て見給へ。是におもひをこめなば、日頃のふるまひ、のどやかになりて、能く友にまじはるに情に通じ、おのづから心みやびになりて、月・花を詠むるにも其なさけふかるべし。[21]

挿絵は『画本朝日山』のものと類以しているが、拡大したり、切り落としたり、変化を加えてある。そこには、絵師についての言及はない。例えば、「うれしきもの」の段の挿絵は男女の語らいの場面をクロース・アップして、『画本朝日山』の他の登場人物を削除している。別の例として、「なまめかしきもの」と題する段の挿絵がある。『画本朝日山』では読書中の女性が登場するのだが（図9）、「清少納言の奇才」には執筆中の女性が描かれている。さらに、後の版では、男性は垣根の後ろではなく女性の前

に配置され、女性は彼の存在に気づいているが、執筆を続けている。このような絵の変容は、女性の教育の重要性を強調し、それが男性と有効な関係を持つことに繋がると指導している。

おわりに

平安時代の古典文学を応用した祐信の『画本朝日山』は、『枕草子』のダイジェスト版としてみることもできるし、また女性の地位向上のための結婚に必要な教育手段としても使われたと考えられる。手紙の執筆、読書、楽器の演奏や茶道といった作業に従事している女性のイメージを描き、女性の日常生活に関するトピックを選出して、それらが花嫁修業として学ばれたことを示唆した。刊行間近な女性向けの本のカタログを巻末に載せたことにより、『画本朝日山』を女性の教訓書というジャンルに位置づけることもできる。さらに『画本朝日山』は、江戸時代における平安古典文学の最初のダイジェスト版であるというだけでなく、清少納言の作品を女性読者たちの間に流行させて、徳川社会の女性たちを教育するという重要な役割を果たしたのであった。

［付記］
資料掲載をご許可いただいた相愛大学図書館春曙文庫に、末筆ながら深謝申し上げます。また、日本語訳に際しまして、亀田和子氏に多大なるご協力をいただきました。厚く御礼申し上げます。

*20　中野節子『考える女たち仮名草子から〈女大学〉』（一九九七年、大空社、一二四―一二七頁）
*21　「清少納言の奇才・同枕草子の奇語」『女用文章往かい振』、一八一八年